SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

谷崎潤一郎と口語文：芥川龍之介と佐藤春夫を補助線に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会 公開日: 2019-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, ともえ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026597

谷崎潤一郎と口語文
——芥川龍之介と佐藤春夫を補助線に

中　村　ともえ

はじめに

昭和二年、谷崎潤一郎と芥川龍之介の間で「小説の筋」をめぐる論争が行われた[1]。谷崎は「饒舌録（感想）」（「改造」昭２・２～12）で、芥川は「文芸的な、余りに文芸的な」（「改造」昭２・４～８）の中で、それぞれ自説を述べ、相手が提示した論点に応答した。

ところで、論争の当事者ではないが、佐藤春夫もこの話題に「読者としての大衆——大衆文学論断片——」（「新潮」昭２・６）でコメントしていた[2]。芥川の「文芸的な、余りに文芸的な」には、谷崎と佐藤とともに久しぶりに人形芝居を見物したときの感想を述べた節もあり、この時期の三人が、発表したテキストを通じてだけでなく対面でも議論を交わし、話題を共有していた様子がうかがえる[3]。

芥川によれば、三人が揃って見物したのは「小春治兵衛」（近松門左衛門作「心中天網島」）で、「僕の言ひたいのは人形よりも近松門左衛門である」という一文に対応するように、「文芸的な、余りに文芸的な」のこの節の見出しは「近松門左衛門」である。この出来事は、谷崎においては小説『蓼喰ふ虫』（「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」昭３・12・４～昭４・６・18）の、同じ演目を主人公夫妻が見物する場面に活かされるが、こちらは人形に惹きつけられる体験と

---

1 「小説の筋」論争については、拙稿「小説に筋をもたらすこと——谷崎潤一郎『刺青』から『蓼喰ふ虫』まで」（「国語と国文学」平17・９）参照。

2 芥川の没後ではあるが、佐藤の「小説作法講話」（「文章倶楽部」昭２・11～昭３・３）には、論争に関するより詳細な議論もある。

3 佐藤は「芥川龍之介を憶ふ」（「改造」昭３・７）で芥川との「友情の歴史」を回顧し、「大正六年の春から…大正八年の暮位…頃まで」と「震災の後の年頃から」芥川が亡くなるまでという、疎遠になった時期をはさむ二つの時期の交友を区別して語っている。大正八年頃の、この時期とは異なる形の三人の関係性とそこから生まれた各人の翻訳や創作については、拙稿「谷崎潤一郎と翻訳——『潤一郎訳源氏物語』まで」（「翻訳の文化／文化の翻訳」平29・３）参照。

して観劇の場面を叙述している。

他にも、佐藤が「文芸時評」(「中央公論」昭２・４～９）の「批評の勃興」で芥川や谷崎の名前を挙げて批評の流行を指摘すると、芥川が「文芸的な、余りに文芸的な」の「批評時代」で応答するなど、この時期の彼らは、複数の話題に関して互いの議論に触発されて議論を展開していた。論争のように対立するわけではないが、話題を共有しつつ、各人の着眼は微妙に異なっている。むしろ議題を共有しているからこそ、用語や力点の違いから各人の問題意識が浮かび上がるとも言える。

本稿では、この時期の三人が共有していたと思われる議題の一つとして、口語文という話題を抽出する。同じトピックから三者がどのように議論を展開したか、それぞれの要点を整理する。芥川龍之介と佐藤春夫の口語文論を補助線にすることで、谷崎潤一郎において口語文という問題がどのように展開されたか、その理路を浮かび上がらせることがここでの目的である。

１．口語文という話題

谷崎潤一郎著『文章読本』(昭９、中央公論社）の「一　文章とは何か」の最初の節である「○言語と文章」には、佐藤春夫の「「文章を口でしやべる通りに書け」と云ふ主義」への短い言及が見られる。

> 言語を口で話す代りに、文字で示したものが**文章**であります。…**同じ言葉でも既に文字で書かれる以上は、口で話されるものとは自然違つて来ない筈はありません。**小説家の佐藤春夫氏は「文章は口でしやべる通りに書け」と云ふ主義を主張したことがありましたが、仮りにしやべる通りを書いたとしましても、文字に記したものを眼で読むのと、それが話されるのを直接に聞くのとは、感じ方に違ひがあります。口で話される場合には、その人の声音(こわね)とか、言葉と言葉の間(ま)とか、眼つき、顔つき、身振、手真似などが這入つて来ますが、文章にはさう云ふ要素がない代りに、文字の使ひ方やその他いろいろな方法でそれを補ひ得る長所があります。(強調は原文、以下同様)

谷崎はここで「言語」と「文章」を「口で話される言葉」と「文字で書かれる言葉」として区別し、次の節（「○実用的な文章と芸術的な文章」）では韻文と散文という一般的な分類を借りて、「**私が此の本で説かうとするものは、韻文でない文章、即ち散文のことであります**」と、自らが論じる範囲を限っている。その後、最終章である「三　文章の要素」の「○文体について」では、上記の

一節を振り返りつつ、再び「「文章は口でしやべる通りに書け」と云つた佐藤春夫氏の言葉」について、「それにも自ら(おのづか)程度のあることで、実際にしやべる通りを書いたら、不必要な重複や、粗野な用語や、語脈の混乱や、その他いろいろの無駄や不都合の多いことは、…明瞭であります」と述べている。

これに対し、佐藤はすぐに「文芸ザツクバラン」(「文芸春秋」昭10・1～5)の「「文章読本」を読む」で、「「文章は口でしやべる通りに書け」といふ僕の主張が或る程度の理解の下に無残にも谷崎流に歪曲されて圧殺されてゐる」と反論した。ただし、佐藤は不満を表明しつつも、「尤も僕の「しやべる通りに書く」説は芥川が代弁してゐる外にはまだ自分で説明した事もないし、それを文章の上でもまだ一度も実現したこともないのだから、それが理解されないのに不服は云へない」とも述べている。彼が名前を挙げる芥川による「代弁」とは、「文芸的な、余りに文芸的な」の「僕等の散文」の冒頭の、次の箇所を指す。

> 佐藤春夫氏の説によれば、僕等の散文は口語文であるから、しやべるように書けと云ふことである。これは或は佐藤氏自身は不用意の裡に言つたことかも知れない。しかしこの言葉は或問題を、――「文章の口語化」と云ふ問題を含んでゐる。近代の散文は恐らくは「しやべるやうに」の道を踏んで来たのであらう。

これに続く「僕は「しやべるやうに書きたい」願ひも勿論持つてゐないものではない。が、同時に又一面には「書くやうにしやべりたい」とも思ふものである」という芥川らしい逆説的な一節はよく知られている。だがここでは彼の言う「「しやべる」こと」と「「書く」こと」の関係には踏み込まず、芥川が谷崎と同様、佐藤の「説」を「しやべるやうに書け」と要約し、「「文章の口語化」と云ふ問題」を引き出していることを確認するにとどめる[4]。

このように、佐藤春夫の「「しやべる通りに書く」説」は、まず昭和二年に芥川の「文芸的な、余りに文芸的な」の中で、次に昭和九年刊の谷崎の『文章読本』で言及され、最後に佐藤自身の「文芸ザツクバラン」や「口語文章論」(「中央公論」昭10・4)で公けにされた。タイミングがずれているため見えにくいが、口語文は、彼らが昭和二年頃に共有していた議題の一つであった。それは、おそらく佐藤が提起した話題であり、佐藤が芥川の追悼文「芥川龍之介を哭す」

---

[4] 「文芸的な、余りに文芸的な」の「ジヤアナリズム」も、「もう一度佐藤春夫氏の言葉を引けば、「文章はしやべるやうに書け」と云ふことである」という一文からはじまっている。「文章の口語化」というフレーズは、「文芸的な、余りに文芸的な」の補輯として扱われている「志賀直哉氏に就いて(覚え書)」(大15頃)にも見える。

(「文芸時評」) の中で上記の「僕等の散文」の一節を引用しつつ述べているところを借りれば、「僕が言はんとしたことの真意は、つひに彼には充分に諒解されなかつたことを僕は後に知つた」という形で、後に佐藤自身に返って来ることになった。佐藤の「「しやべる通りに書く」説」は、彼が自ら主張する以前に、芥川と谷崎において、彼の意とはずれた形で展開されたのである。

2．芥川龍之介と佐藤春夫の口語文論

「口語文」の語こそ共有しているが、三人の議論は用語や力点が微妙に異なっている。たとえば佐藤が「「しやべる通りに書く」説」と称し、芥川が「「文章の口語化」と云ふ問題」と総括するところを、谷崎は「現代口語文」という語によって集約している。それぞれの議論の要点を、まずは芥川と佐藤について整理する。

芥川は、「「文章の口語化」と云ふ問題」を近代の「散文」の問題として捉え、詩人の手になる散文が「僕等の散文」に与えた影響、さらに詩歌の中の「小説の句」へと論点を移動させている。「文芸的な、余りに文芸的な」の「僕等の散文」の次の見出しは「詩人たちの散文」で、その次は「詩歌」であった。

芥川によれば、「明治の昔からじりじり成長をつづけて来た」「僕等の散文」は、遠くは正岡子規、近くは北原白秋や木下杢太郎といった詩人（俳人・歌人）たちの散文の恩恵を受けて来たという。谷崎も「現代口語文の欠点について」(「改造」昭4・11) を「明治の中葉以後に始まつて今あるやうな発達した日本文の形式—いはゆる言文一致体、或は口語体と称する文体は、現在では殆ど完成の域に行き着いたといつていゝ」とはじめており、佐藤もまた、「口語文章論」で「言文一致の口語文が変てこな方向へ発達してしまつたのを見た僕は、もう一ぺん口語から出発した文章を試みることが有意義だらうと考へて「喋るやうに書く」の説を抱いた」と自説の背景を説明している。いまある口語文を、明治から発達して来てこのような形になったものとして捉えるという前提を、三人は共有している。芥川は、それを散文と詩の関係という観点から論じているのである。「「話」らしい話のない小説」を「あらゆる小説中、最も詩に近い小説」として評価しようとした「小説の筋」論争での議論も含め、「文芸的な、余りに文芸的な」の芥川は、この観点から複数の話題を論じている。口語文の歴史が詩と無関係ではないという彼の主張は、他の二人の口語文論にはないものである。

佐藤は「文芸ザツクバラン」で、自らの説を「生な現実をぶしつけに紙の上へぢかに押しつけてみる一つの手法としての謂」、「素裸の放下のスタイル」と

説明している。彼は、谷崎の『文章読本』の「○文体について」の上記の一節を「それにも自ら程度のあることで」という部分に圏点を振って引用し、その部分にあらわれている谷崎の「微温的な精神」に対し、「僕の口語文といふのは無法に極端にそれをやつてのけて不必要な重複には自づと心理の混雑状態を示し、粗野な用語や語脈の混乱からも筆者の人格は無論心理的生理的状態までも紙面の上に在らせよう…といふつもりである」と、『文章読本』の言葉を取り込みながら「口語文」を独自に定義しなおした。

このような佐藤の口語文論が、芥川のそれとずれていることを端的に示すのが、ヒステリーという話題である。佐藤は「芥川龍之介を哭す」で、「僕はヒステリイの療法にその患者の思つてゐることを何でも彼でも書かせる——或は言はせると云ふことを聞」いたとはじまる「文芸的な、余りに文芸的な」の「ヒステリイ」の節について、名前はないが自分との会話をもとにしていると言い、「窮屈なチヨツキを着てゐる」ように見えたこの時期の芥川に、「表現のために…刻苦」するのでなく「文章をなぐり書きすることを、…全くしやべるが如く書くことを勧告してみた」と、芥川の「僕等の散文」の一節を引きつつ述べている[5]。同じ内容は、別の追悼文（「『是亦生涯』」（「改造」昭２・９））でも述べられており、そこでは「文芸的な、余りに文芸的な」の二つの節がより明確に接続されている。

> 「文芸的な余りに文芸的な」の中にヒステリーといふ項目があるのは…吾々の話から彼が考へたものである。実際吾々はヒステリーと文学の話をした。さうして話題は幾度か循環して芸術上のことに及んだ。僕は彼がいつも余り金石文字的の表現でなければ承知出来ないのを知つてゐるのでもつと気軽に、即ち恰度しやべるやうに無雑作に書いて見たらといふことを言ひ出した。…「文芸的な余りに文芸的な」の「僕等の散文」の書き出しに「佐藤春夫の説に依れば云々」といふのは矢張りこの時の話題である。

佐藤の回想に従えば、ある夜の一つながりの話題であったところを、「文芸的な、余りに文芸的な」の芥川は別の話題として切り離して論じた。佐藤がしゃべるように書くと説明したであろうヒステリーの療法について、芥川の「ヒス

---

5 芥川の身近にいた小島政二郎は、芥川が「文章」の犠牲になっていることに気付いた佐藤が次のように忠告していたと証言する。「小説はいゝ文章を書くことではなくて、人間の一人生の真を書く—いや、真に肉迫することである筈だ。／佐藤春夫はこれを知っていて、しばしば芥川に忠告している。つまり、芥川は名文を書こうとして、もっと大事なものを取り逃している。それを佐藤は窮屈なチョッキと云って、／「芥川君、その窮屈なチョッキを脱ぎ給え」／小説には名文は不必要なのだ」（『長篇小説　芥川龍之介』昭52、読売新聞社→平20、講談社文芸文庫）。

テリイ」は「書かせる――或は言はせる」と、書くか言うかのどちらか一方を選択するかのように説明している。

佐藤の「「しやべる通りに書く」説」は、谷崎が「言語」すなわち「口で話される言葉」の性質だとして「文章」から排除した、「不必要な重複」や「粗野な用語」や「語脈の混乱」を、むしろ積極的に推し進めることで、書き手の心理を開放しようとする方法であった。芥川と谷崎が「しやべるやうに書け」と命令形で要約していることにあらわれているように、それは実践されるべき一つのメソッドとして提案されていたと考えられる。

3．谷崎潤一郎の口語文論

では、谷崎が言う「現代口語文」とはどのような意味か。表題にこの語を含む「現代口語文の欠点について」ではなく、佐藤春夫の説への言及もある『文章読本』にもとづいて考察する。

> 私は、自分の長年の経験から割り出し、文章を作るのに最も必要な、さうして現代の口語文に最も欠けてゐる根本の事項のみを主にして、此の読本を書いた。…云はゞこの書は、「われわれ日本人が日本語の文章を書く心得」を記したのである。

引用したのは、『文章読本』の序文の、この書が何を書いたものであるかを説明する一節である。「現代の口語文に最も欠けてゐる」事項を主にしたとは、この本が評論「現代口語文の欠点について」の問題意識を引き継ぐものであることを示している。

ここで注目したいのは、「文章」の語が「現代の口語文」、さらに「日本語の文章」と言い換えられていることである。これは『文章読本』で言う「文章」が現代口語文のことであり、また、日本語の文章のことであるということをあらわしている。『文章読本』の「一　文章とは何か」には、「○現代文と古典文」と「○西洋の文章と日本の文章」という節が並んでいる。序文とこの節の配列を踏まえると、『文章読本』の「文章」とは、古典の文章と対置される現代の文章であり、西洋語の文章と対置される日本語の文章だということになる。

その「○西洋の文章と日本の文章」の節で、西洋の文章の例の一つに挙げられているのが、アーサー・ウェイリーによる『源氏物語』の英訳、つまり古典の文章を西洋語の文章に翻訳したものである。谷崎はまずテオドール・ドライザーの小説『アメリカの悲劇』の一節を掲げ、「原文を、出来るだけ忠実に、逐字的に」「日本語としてこれが精一杯と云ふ程度にまで直訳した」ものと、それ

を「もう少し原文を離れて、…日本文らしく」直したものという二種類の試訳を提示する。次いで『源氏物語』の「須磨」巻の一節とウェイリーによる英訳を、それを日本語に直訳したものを添えて提示し、後の章（「三　文章の要素」）ではさらに『源氏物語』の同じ一節を「原文のなだらかな調子を失はないやうにして、現代語に訳してみ」たものと、それを「現代の人」が「普通」に書くようになおしたものという二種類の試訳を提示している。

谷崎はこれらの試訳を通じて、西洋語の文章を可能な限り原文に即いて翻訳すると西洋語の特徴を持った日本語の文章ができ、それと同様に、古典の文章を原文に即くように現代語訳することで、古典の文章の特徴を持った現代の文章を作り出すことができると証明しようとしているようである。得られた訳文を、それぞれ「日本文らし」い文章、「現代の人」が「普通」に書く文章になおしてみせるのは、原文に即くように訳した訳文の異様さを示すためだろう。

『文章読本』の谷崎は、西洋語の文章を翻訳するのと同じように古典の文章をある方針を立てて現代語訳することによって、古典の文章に近い現代口語文を作り出すというパフォーマンスをしていた。そこで翻訳する対象として選択されたのが、『源氏物語』であった。別の章（「二　文章の上達法」）で「源氏物語派」「非源氏物語派」という分類が立てられていることからも、『文章読本』において『源氏物語』が一つの作品というより、文章の種類を代表するものとして扱われていることは明らかである。『文章読本』の谷崎は、『源氏物語』の英訳と現代語訳を手がかりに、現代口語文の変種（ハイブリッド）を人為的に作り出す実験をしていたのである。

おわりに

谷崎が言う「現代口語文」とは、現代の日本語の文章のことであり、それは西洋語の文章と古典の文章という二つの異なる種類の文章と対置され、翻訳を通して変形の可能性を探られていた。昭和二年頃に佐藤春夫や芥川龍之介と共有していた口語文という話題から、谷崎は、複数の種類の文章の中の一つとして、それらとの対照によって現代の日本語の文章を捉える議論を展開した。「現代口語文の欠点について」では、明治から発達して来たいまある口語文に「まだいくらでも改良すべき余地があること」を主張していたが、『文章読本』では、口語文を変形する方法として、異なる種類の文章を原文に即して翻訳するという方法を示し、自ら試みている。

現代口語文は、どこまで可変的であるか。古典の文章を然るべき方針を立て

て翻訳することで、現代口語文として「これが精一杯と云ふ程度にまで」古典の文章に接近した文章を作り出すこと。この『文章読本』の中の『源氏物語』の現代語訳の試みが、当時既に準備をはじめていた『源氏物語』の現代語訳、後の『潤一郎訳源氏物語』(全二十六巻、昭14～昭16、中央公論社)の原型になっていることは明らかである。『源氏物語』の現代語訳は、谷崎にとってそのような実験的な現代口語文論であったと考えられる。

とすれば、必要なのは、『潤一郎訳源氏物語』の訳文がどのようなものであるか、もう少し厳密に言うなら、その訳文がどのような口語文――現代の日本語の文章――になっているかを明らかにすることであろう[6]。それは谷崎による『源氏物語』の現代語訳を、翻訳という方法による現代口語文論として考察することである。

[付記]

- 引用は全集に拠った。中略は…、改行は／で示した。ルビは適宜省略した。
- 本研究は、JSPS科研費JS16K16760の助成を受けたものである。

[6] 一端は、拙稿「現代語訳の日本語――谷崎潤一郎と与謝野晶子の『源氏物語』訳」(井上健編『翻訳文学の視界　近現代日本文化の変容と翻訳』平24、思文閣出版)で明らかにした。